鹿児島県立埋蔵文化財センター
Kagoshima Prefectural Archaeological Center

埋文だより

第７２号
平成２９年　２月２７日発行

上空から見た久慈白糖工場跡（赤丸付近）周辺

南海の集成館プロジェクト

黒糖の生産は，江戸時代を通じて薩摩藩の重要な財源でした。ところが，幕末期に黒糖の価格が下落し，藩は経済的な打撃を受けます。この状況を改善するため，藩は黒糖生産の中心地であった奄美大島に「白糖工場」の建設を計画し，久慈（瀬戸内町）のほか，金久（奄美市名瀬）・瀬留（龍郷町）・須古（宇検村）の４か所を選定します。これらの施設は，建材に輸入煉瓦やトタン・凝灰岩切石等を使用し，蒸気機関による洋式機械を導入するなど，当時としては最先端のものでした。なかでも久慈の工場は，煙突７本・建物の規模が90m×27m（２階建）という威容を誇る大規模なものであったといわれています。

（２ページに関連記事）

目　次

・南海の集成館プロジェクト……1
・遺跡公開　現地説明会開催……2・3
・発見！発掘速報……4・5
・遺跡詳解……6

遺跡公開！現地説明会開催

久慈白糖工場跡

平成28年10月22日（土）に大島郡瀬戸内町にある久慈白糖工場跡で現地説明会が開催されました。当日は天気に恵まれ，10月下旬にもかかわらず気温が30℃近くに上昇しましたが，多くの見学者が訪れ，薩摩藩が手がけた大プロジェクトの一端を感じていました。

石垣の説明

調査開始前の様子

県立埋蔵文化財センターでは，幕末から明治期の産業遺産の実態を解明するために，平成27年度から「かごしま近代化遺産調査事業」に取り組んでいます。久慈白糖工場跡の発掘調査も，この事業の一環として行われ，奄美大島にある白糖工場の最初の本格的な調査となりました。

煉瓦構築物の説明

煉瓦の出土状況

天保年間（1830～1844）に奄美大島を領地とする薩摩藩は，黒糖による収入が藩の重要な財源となります。しかし，和三盆などの国産の上質な砂糖が台頭し，次第にその地位が低下します。

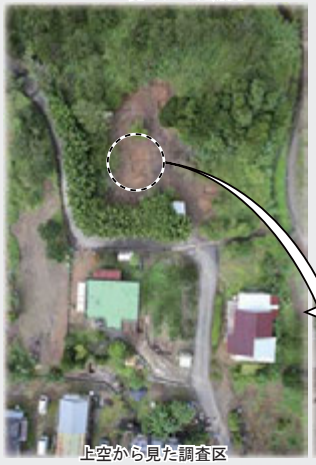
1851（嘉永4）年に島津斉彬は白糖製造を命じ，成功しましたが，大量生産ができなかったことや斉彬の死去により本格的な生産をするまでには至りませんでした。1863（文久3）年に奄美大島に白糖工場の建設が計画され，スコットランド人商人のグラバーが請け負いました。アイルランド人技師のウォートルスが建築や機械全般の設置や整備を担当し，白糖製造についてはマッキンタイラーが指導にあたりました。

見つかった煉瓦

久慈白糖工場は1867（慶応3）年に完成し，白糖の製造は順調にスタートしたようですが，燃料不足や台風による被害などにより5年で廃止となり，1871（明治4）年にはその短い歴史に幕を下ろすこととなりました。

遺物の説明

今回の調査で，方形と円形の煉瓦構築物が見つかりました。円形のものは煙突の基部である可能性もありますが，壁の厚みが煉瓦の長い部分の1個分しかないことから，高さが18mあったとされる煙突を支えるには厳しいのではと考えられます。両方がどのような使われ方をしていたのかは，今後詳しく検討していく必要があります。


上空から見た調査区

方形と円形の煉瓦構築物

また，イギリスで生産されたとされる煉瓦も見つかりました。「STEPHENSON」「COWEN」とある刻銘は，煉瓦工場の名前ではないかといわれています。

遺跡公開！現地説明会開催

（公財）埋蔵文化財調査センター

小牧遺跡

東九州自動車道の建設に伴う発掘調査を行っている鹿屋市の小牧遺跡で，12月10日（土）に現地説明会が開催されました。

今年度2回目の現地説明会となり，前回（9月）はおもに中世の集落跡の紹介でしたが，今回は中世の集落跡の下から発見された，縄文時代後期（約4,000年前）の祭祀などを行った集落跡に焦点をあてたものとなりました。

天気に恵まれ多くの見学者が訪れました。順路の各ポイントで説明を聞いたり，石皿や土器等の遺物をカメラに収めたりして，約4,000年前の情景に思いをはせた様子でした。

今回の調査で，焼けた花崗岩製の石皿を割り，地面に立てた状態の遺構が17基，割れた石皿といくつかの丸い礫で構成された集石遺構が9基発見されました。また，それらの近くに竪穴住居跡や土坑が多数分布しており，中央部の石皿を利用した配石遺構を竪穴住居跡群が取り囲むような集落の構造があったと考えられます。

土坑

石皿
石皿を立てた遺構

石皿
石皿と礫でできた集石

竪穴住居跡

見学コースの様子

石皿の説明

住居跡の説明

配石遺構の説明

遺物の説明

調査範囲から焼けた土が発見されていないことから，焼けた石皿は別の場所で焼いてから持ち寄り，立てた状態で埋めるという儀礼・祭祀を行っていたのではと考えられます。また，石皿の材料である花崗岩も遺跡から直線距離で約30㎞離れた肝付町の国見岳周辺のものと同じで，海や川を利用して運んできたのではないかと考えられます。

配石遺構は，縄文時代中期から後期のものは全国的にみられ，墓や祭祀に関連するものとされています。その中でも，石皿を伴う配石遺構は主に九州でみられることから地域性の強い儀礼・祭祀遺構と考えられますが，小牧遺跡で見つかった配石遺構群を持つ集落遺跡は全国に例がありません。

この遺跡ではこれまでに，指宿式土器や石剣の破片と考えられる石製品，石鏃，石匙，石錘などが多数発見されており，その中で代表的なものを紹介した展示室内は，それぞれの遺物に関して質問する方も多く，熱気に包まれていました。

発見！発掘速報

今年度，発掘調査が行われた，県立埋蔵文化財センターと（公財）埋蔵文化財調査センターの発掘調査成果の一部を紹介します。

…県立埋蔵文化財センターの発掘調査

…（公財）鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センターの発掘調査

旧石器時代から続く人々の営み

～川久保遺跡（鹿屋市）～

川久保遺跡は，鹿屋市串良町細山田に所在し，旧石器時代から中近世までの遺構・遺物が発見されている複合遺跡です。

縄文時代早期では，蒸し焼き調理をした跡である集石遺構約 130 基や小型のナイフと考えられる石匙が発見されました。

集石遺構

集石遺構

石匙

弥生時代では，イネの穂積具と考えられる石庖丁が出土しました。

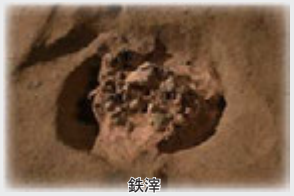
古墳時代では，竪穴住居跡約 50 基が検出されました。竪穴住居跡 48 号では，多くの土器片が住居跡内から出土しました。周辺にも竪穴住居跡があるため，当時の人が居住しなくなった後に土器を廃棄したものと考えられます。また，鉄鏃や鉄斧等の鉄製品も出土しており，それらを製作したと考えられる鍛冶関連の遺構も見つかっています。遺構内からは強い熱を受けた際の焼土や鉄を加工した際に出る鉄滓，鍛冶炉の底に溜まった鉄滓などが確認されています。

石庖丁

住居跡の全景

住居跡内から出土した土器

中世では，土坑墓が 4 基検出されました。右下の写真の土坑墓は，170×100 ㎝の大きさで，北側には白磁（中国製陶磁器）が納められていました。


鉄滓

鍛冶炉跡

土坑墓

このように，本遺跡では各時代の貴重な遺構・遺物が多数発見されており，今後の研究の貴重な資料になると考えています。

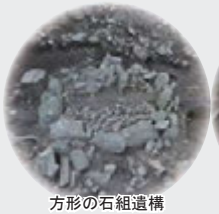
黄金を目指して

～河内山鉱山跡（指宿市）～

河内山鉱山跡は，指宿市池田に所在し，池田湖の約 3 km 北側に位置します。1899（明治 32）年から 1943（昭和 18）年まで金や銀の採掘をしていた鉱山で，遺跡周辺には南西側に大谷鉱山，北西側に花籠鉱山，北東側に岩平鉱山がそれぞれ隣接し，近代の鉱山が集中する地域となっています。

石垣

発掘現場見学（指宿市立池田小）


方形の石組遺構

円形の石組遺構

発掘調査は，5 月から 9 月までの 5 か月間行われ，鉱山稼働時のものと考えられる石垣が多数検出されました。本遺跡最大の石垣は，残存幅 20.03m，高さ最大 5m になります。

また，当時祀られていた祠の基壇である可能性が高い石組遺構が 2 組検出されました。

どんな生活をしていたのでしょう

～春日堀遺跡（志布志市）～

春日堀遺跡は，志布志市有明町蓬原に所在し，菱田川右岸の標高約 30m の河岸段丘上に位置しています。平成 26 年度からの調査で，縄文時代早期（約 9,500 ～ 7,800 年前）と古墳時代（約 1,600 ～ 1,400 年前）の人々の生活跡が発見されました。とりわけ今年度の調査では，縄文時代早期の遺構が良好な状態で検出されました。そのうちの 2 例を紹介します。

まず竪穴住居跡です。地層の断面を観察する壁のおかげで，5m×4m の四角い竪穴の周囲に，直径 7 m 程度の浅く円形に掘られた部分をみつけることができ，2 段の竪穴になっていることが分かりました。

住居跡の発見状況

竪穴の掘込みのようす

調査終了後の住居跡全景

次に連穴土坑（燻製等を作った調理施設）を紹介します。今年度の調査で，連穴土坑が広い範囲で見つかりました。その中に，同じ時代と考えられる連穴土坑 2 基の一部が，重なり合って発見されました。どんな事情があって，同じ所に作られたのでしょうか。

重なり合った連穴土坑の断面

左側の連穴土坑

右側の連穴土坑

他にも，集石遺構や落とし穴等の遺構も見つかっています。今後も，発見される遺構が増えてくることが予想されます。遺構一つひとつの調査はもちろんのこと，遺跡全体を見て，発見された遺構同士を関係づけて考えることによって，当時の人々の生活をより鮮明に感じることができるでしょう。

遺跡詳解

鹿児島（鶴丸）城跡（鹿児島市）

鹿児島（鶴丸）城跡では，平成26年度から，鶴丸城跡保全整備事業の一環として発掘調査を行っていますが，これまでに多くの成果が得られています。平成28年12月3日（土）に現地説明会，2週間後の17日（土）に「かごしま遺跡フォーラム2016」を開催し，今までの調査で明らかになってきた鹿児島（鶴丸）城の魅力を多くの方々に伝えることができました。

①

内堀から外堀へ流れる水の量を調節するためのものと考えられる井堰」を確認しました。

②

能舞台の「橋掛り」跡を確認しました。音響効果を高めるために，床面は溝状で漆喰を敷き固めていました。

③

暗渠排水溝や「番所」跡が確認され，御楼門の基礎部分がどのような構造になっていたかがわかりました。

④

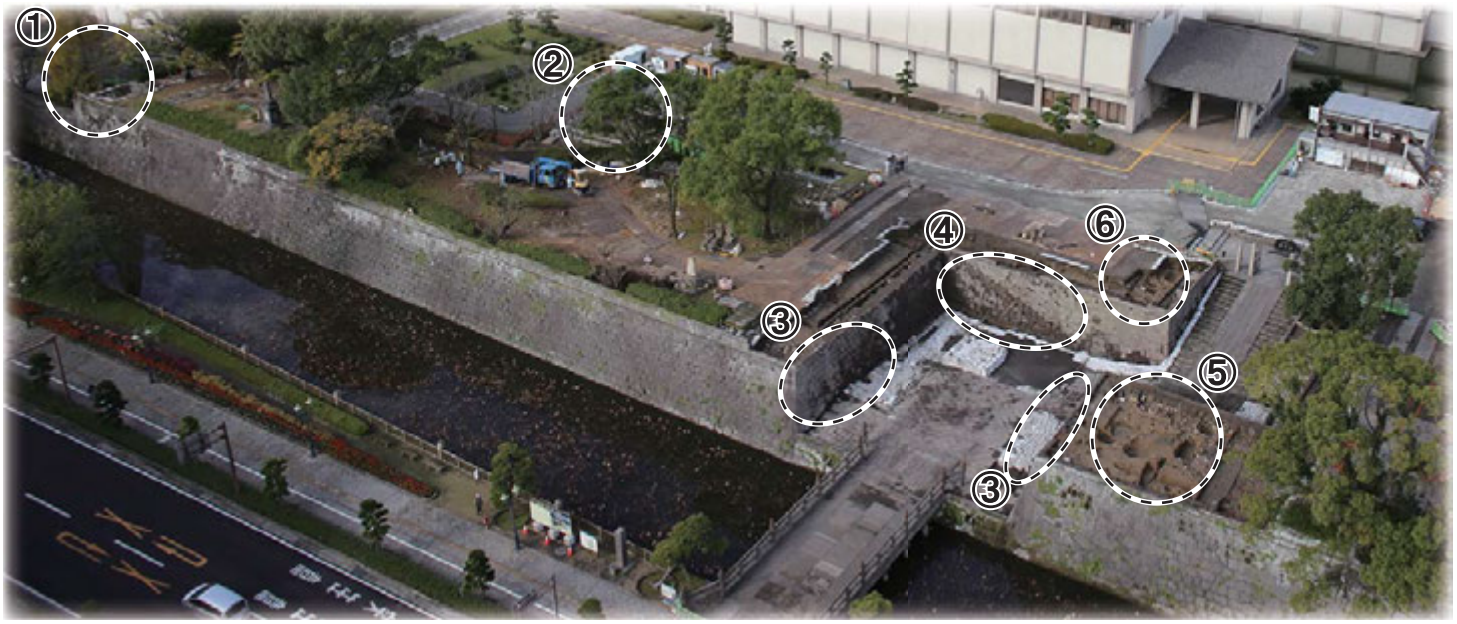
西南戦争時のものと考えられる銃弾・砲弾の痕跡が確認されました。

⑤

武具類を保管する「兵具所」跡と1927（昭和2）年に建てられた第七高等学校造士館時代の「天文観測室」跡を確認しました。

⑥

城の中に水が溜まらないようにするために，石垣に沿って排水溝が巡っていました。



当センターの見学は，土曜・日曜・祝日・年末年始を除き，毎日午前9時～午後5時まで，入館料は無料です。

なお，当センターのホームページは，鹿児島県（http://www.pref.kagoshima.jp/）または，上野原縄文の森(http://www.jomon-no-mori.jp)からお入りください。

検索キーワード　上野原縄文の森　検索　クリック

埋文だより　第72号
発　行　日　平成29年2月27日
編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市
国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811・FAX 0995-48-5820
URL:http://www.jomon-no-mori.jp
E-mail:maibun@jomon-no-mori.jp